2）久慈川の魚類

アユやサケの遡上することで知られる久慈川（久慈川水系）には数多くの魚達がみられる。阿武隈淡水動物研究会によって 1986 年から行われている魚類調査では、2002 年現在までに 29 科 85 種の魚類が確認された。このうち在来種は 65 種（全体の 76.5%）で、主にコイ科やハゼ科の魚種数が多い。確認した魚種数が多いのは、久慈川が淡水域だけでなく、海との接点である河口に汽水域を持っていることによる。ここではボラやスズキだけでなく、特に初夏から秋にかけてはコトヒキやシマイサキなどの海魚をみることができる。調査は継続中であるが、今後の調査によってはコイ科の国内外来種や、河口域では新たな海魚が採集される可能性があり、確認種は今後増加するものと思われる。

分布上珍しい種や貴重な種としては、関東地方の分布としては最も標高の低い場所に生息している在来のイワナや、北方系の降海型イトヨ、分布の北限に近いボウズハゼなどがみられる。また、茨城県内において減少しており、久慈川水系においても減少傾向にある種として、スナヤツメやカワヤツメ、キンブナ、ヤリタナゴやタナゴなどの在来タナゴ類、ホトケドジョウ、ギバチ、メダカ、オオヨシノボリ、ジュズカケハゼ、シロウオ、陸封型カジカ、回遊型カジカなどがあげられる。

しかし現在の久慈川では、人的に移植されて分布を広げた魚が非常に多くなっている。中流域や支流では中部地方以西原産のオイカワやカワムツ、ヌマムツが、流域の溜池では北アメリカ原産のオオクチバス（ブラックバス）やブルーギルが増加した。また、近年では釣人のために放流されるイワナやヤマメ、愛好家によって放流されるメダカやタナゴ類が多くなった。これらにより、同じ種類の魚であっても「久慈川水系の魚達の持つ独自の色彩や模様を決めている遺伝子が攪乱されてしまう」という危険性がある。

今後は、現在残る久慈川の姿を大切にし、魚だけでなく多くの生き物の住める川について考えていく必要がある。

▲日本初のプールを持った粟原床固の全断面魚道

表 6-5　久慈川で確認された魚類

No	目 名	科 名	種 名	備 考
1	ヤツメウナギ目	ヤツメウナギ科	カワヤツメ	
2			スナヤツメ	
3	ウナギ目	ウナギ科	ウナギ	
4	ニシン目	ニシン科	サッパ	
5			コノシロ	
6	コイ目	コイ科	ギンブナ	
7			キンブナ	
8			ゲンゴロウブナ	国内外来種
9			コイ	
10			タナゴ	
11			タイリクバラタナゴ	国外外来種
12			ヤリタナゴ	
13			ハクレン	国外外来種
14			ハス	国内外来種
15			オイカワ	国内外来種
16			カワムツ	国内外来種
17			ヌマムツ	国内外来種
18			ソウギョ	国外外来種
19			アブラハヤ	
20			マルタ	
21			ウグイ	
22			モツゴ	
23			ビワヒガイ	国内外来種
24			タモロコ	国内外来種
25			ツチフキ	国内外来種
26			ニゴイ	
27			カマツカ	
28			スゴモロコ	国内外来種
29		ドジョウ科	シマドジョウ	
30			ドジョウ	
31			ホトケドジョウ	
32			フクドジョウ	国内外来種
33	ナマズ目	ギギ科	ギバチ	
34		ナマズ科	ナマズ	関東の個体は移殖との説有
35	サケ目	キュウリウオ科	ワカサギ	
36		アユ科	アユ	
37		シラウオ科	シラウオ	
38		サケ科	サケ	
39			サクラマス（ヤマメ）	
40			ニジマス	国外外来種
41			ブラウントラウト	国外外来種
42			イワナ	
43	トゲウオ目	トゲウオ科	降海型イトヨ	
44	ボラ目	ボラ科	セスジボラ	
45			メナダ	
46			ボラ	
47	ダツ目	メダカ科	メダカ	
48		サヨリ科	クルメサヨリ	
49			サヨリ	
50	カサゴ目	コチ科	コチ	
51		カジカ科	アユカケ	国内外来種
52			陸封型カジカ	
53			回遊型カジカ	
54	スズキ目	スズキ科	スズキ	
55		サンフィッシュ科	ブルーギル	国外外来種
56			オオクチバス（ブラックバス）	国外外来種
57		ヒイラギ科	ヒイラギ	
58		タイ科	クロダイ	
59		シマイサキ科	シマイサキ	
60			コトヒキ	
61		イソギンポ科	イソギンポ	
62		ハゼ科	ボウズハゼ	
63			シロウオ	
64			ミミズハゼ	

No	目 名	科 名	種 名	備 考
65	スズキ目	ハゼ科	アゴハゼ	
66			ビリンゴ	
67			ジュズカケハゼ	
68			ウキゴリ	
69			スミウキゴリ	
70			マハゼ	
71			アシシロハゼ	
72			ヒメハゼ	
73			アベハゼ	
74			スジハゼ	
75			シマヨシノボリ	
76			オオヨシノボリ	
77			トウヨシノボリ	
78			シモフリシマハゼ	
79			ヌマチチブ	
80		タイワンドジョウ科	カムルチー	国外外来種
81	カレイ目	ヒラメ科	ヒラメ	
82		カレイ科	イシガレイ	
83			ヌマガレイ	
84	フグ目	カワハギ科	カワハギ	
85		フグ科	クサフグ	

1. この目録では、1986～2002年の阿武隈淡水動物研究会の調査によって久慈川本流とその支流、そして流域の水路、溜池等で確認した魚種を中心とし、河口域で確認した海魚についても含めてとりまとめた。

2. 和名は、環境庁（1997）「種の多様性調査（動物分布調査）対象種一覧　淡水魚類」にしたがったが、これに記載のない種（海水魚等）については、岡村収・尼岡邦夫（編・監修）（1997）「日本の海水魚」（山と渓谷社）や中坊徹次（編）（2000）「日本産魚類検索全種の同定 第二版」に従った。

（稲葉修氏調査結果をもとに作成）

①上流域に多い魚たち

茨城・福島・栃木の 3 県にまたがる八溝山に水源を持つ久慈川は、多くの支流を合流させる。これらの支流の上流部はいずれも山間部を流れる渓流であり、ここでは魚種数は少ないものの、サケ科の渓流魚が生息している。かつて福島県側の支流にまで遡上したサクラマスは現在では少なくなったが、流域の民家には当時をしのばせる漁労具が残されている。

写真提供:稲葉　修氏

イワナ（サケ科）

河川上流に生息する個体は全長 30 cm前後に成長する。水生昆虫の幼虫や水面に落ちた昆虫、小動物を食べる。産卵期は秋。久慈川水系では一部の支流の源流部にのみ在来個体がみられるが、数は少ない。現在では多くの支流に養殖された他水系産のイワナが放流されている。写真は放流された個体。

写真提供:稲葉　修氏

ヤマメ（サケ科）

サクラマスの河川陸封個体で、全長は 30 cm前後。水生昆虫の幼虫や水面に落ちた昆虫などを食べている。産卵期は秋。イワナよりも下流側に生息するが、久慈川水系の支流では在来イワナの分布域が限られているため、多くの沢で源流部にまで生息している。

写真提供:稲葉　修氏

アブラハヤ（コイ科）

全長は 14 cm前後。河川上流域の、河川勾配が緩やかになる辺りから中流域にかけての淵や淀みに多い。雑食性。産卵は春から初夏にかけて行われる。久慈川水系では中流域より上流にみられるほか、比較的支流に多い。久慈川流域では「ニガサコ」や「ニガッペ」と呼ばれている。

写真提供:稲葉　修氏

陸封型カジカ（カジカ科）

全長 15 cm前後。河川上流域から中流域の瀬に生息するが、主に上流域の沢に多い。水生昆虫や他種の幼魚を食べている。産卵は早春から始まり、瀬の石の下に卵を産む。久慈川水系では支流となる沢に生息するが、近年は環境の変化で減少している。遺伝子保護の面からも、他水系産の個体を放流することなく、その場所ごとの在来個体群を保全する必要がある。

②中流域に多い魚たち

久慈川は中流域の区間が長く、ここでは多くの支流が合流して水量が増え、次第に大きな流れになっていく。また、水温も上昇していき瀬や淵が交互にあらわれて、魚種数やその個体数が多くなっていく。アユやサケの遡上が確認でき、漁をする人だけでなく、釣人や行楽に訪れる人々も多い。

写真提供:稲葉　修氏

アユ（アユ科）

全長は大きな個体で 30 cmほどになる。稚魚は、春になると川を遡上し、中流域で成長する。産卵は秋に行われ、一部の個体は冬を越すが、多くの個体は一年で一生を終える。久慈川水系では、本流だけでなく多くの支流に遡上個体がみられる。茨城県側では毎年 6 月にアユ釣が解禁となり、多くの釣人で川が賑わう。

写真提供:稲葉　修氏

ウグイ（コイ科）

全長約 30 cm。生活の違いによる淡水型と降海型がみられるが、久慈川中流域に生息するのは淡水型と思われる。産卵は 4～5 月に瀬の砂礫底で行われ、この時期の婚姻色のでた個体は「アイソ」と呼ばれている。この産卵行動を利用した「アイソ漁」は久慈川の初夏の風物詩のひとつとなっている。

写真提供:稲葉　修氏

オイカワ（コイ科）

全長は最大で 16 cmほど。河川中流域の平瀬に多い。はっきりとした年代はわからないが、久慈川水系へは他種の魚類の放流にともなって侵入した外来種である。現在では本流だけでなく、支流の多くや流域の水路や溜池でも普通にみられるようになった。本種は環境や水質の悪化した河川においても繁殖することが知られている。

写真提供:稲葉　修氏

カマツカ（コイ科）

全長 20cm ほどに成長する。河川中流域から下流域の砂地に多い。久慈川水系では、本流の中流域で確認できるほか、浅川や山田川、里川などの支流にも多い。驚くと砂の中に潜り、目だけを出している。久慈川流域では「カワギス」などと呼ぶ人もいるが、支流となる里川流域では「ドンガンボ」や「バカッチョ」などとも呼ばれ、川遊びをする子供たちや釣り人に親しまれている。

写真提供:稲葉　修氏

ニゴイ（コイ科）

全長 55 ㎝前後に成長する。中流域から下流域に多く、久慈川では特に中流域で姿を見ることが多くなってきた。水生昆虫や藻類の他、他種の幼魚や卵をも食べてしまうことがある。産卵は砂礫底で行われている。久慈川流域では「サイ」と呼ばれている。

写真提供:稲葉　修氏

シマドジョウ（ドジョウ科）

全長は 14㎝になるドジョウの仲間であるが、関東地方では小型の個体が多いとされている。久慈川水系から確認した個体も、全長 10㎝以下の個体が多かった。

口ひげは 3 対（6 本）である。河川では、特に中流域の砂礫底に多く、小型の水生昆虫などを食べている。久慈川本流だけでなく、多くの支流にもみられ、「スナハギ」や「スナモグリ」などと呼ばれている。

写真提供:稲葉　修氏

シマヨシノボリ（ハゼ科）

全長は約 8 ㎝ほど。久慈川では中流域の瀬に多い。産卵は初夏で、卵は石の裏に産み付けられる。孵化した仔魚は海に降りて生活し、全長 2 ㎝ほどになると川を遡上してくる。久慈川流域では、オオヨシノボリと共に「サラカジカ」や「ヘボカジカ」と呼ぶ人もいる。

写真提供:稲葉　修氏

ウキゴリ（ハゼ科）

全長 13㎝前後に成長するハゼ科の魚。河川中流域から下流域と、その流域の溜池や湖沼などに生息する。川の中では淵やよどみに多い傾向がある。

久慈川流域では中流域から下流域にかけてと、流域の池や沼などに生息している。

③下流域や汽水域に多い魚たち

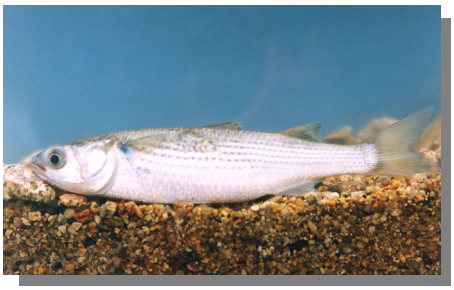
120 ㎞以上にわたって流れてきた久慈川も、日立市南部で太平洋へと注ぎ旅を終える。中流域に比べると下流の区間は短いが、ここでは淡水と海水が混じり合う汽水域がみられ、海魚もみられるようになる。ここは海と河川を行き来する多くの生物が通過する地点であり、山と海の恵みが行き交う大切な場所でもある。

写真提供:稲葉　修氏

コイ（コイ科）

全長は 1m 近くになる。日本各地に分布するが、古くからの移殖によって国内の自然分布域は不明とされる。産卵は春から初夏に岸辺の水草等のある場所で行われる。

久慈川水系では、主に中流域から下流域にかけて広い範囲に生息し、本流だけでなく多くの支流にも見られる。また、流域の溜池に釣り人や釣り団体によって放流されることも多い。



写真提供:稲葉　修氏

ボラ（ボラ科）

全長 60cm ほど。日本各地に分布する。未成魚や成魚は河口付近に多く、中流域に姿をあらわすこともある。

久慈川本流では下流域から河口に多いが、堰などのない時代は、常陸大宮市富岡あたりにまでやってきた個体が見られたという。久慈川河口では、ボラの他にもよく似た魚としてメナダやセスジボラも確認できる。

写真提供:稲葉　修氏

スズキ（スズキ科）

全長は 1m になる。日本各地の外洋や沿岸域に分布するが、未成魚や成魚は河川中流域にまで姿をあらわす。中流域にまでやってくる個体は、アユなどを追って遡上しているようである。

久慈川では、ボラと同様にかつては常陸大宮市富岡付近にまでやってきた個体が見られたというが、現在は確認できない。下流域や河口に多く、その豪快な引きから、釣り人にも人気がある魚である。

写真提供:稲葉　修氏

コトヒキ（シマイサキ科）

全長 30cm ほどになる。主に中部地方以南の沿岸域に多いとされているが、茨城県の沿岸にも見られる。汽水域を好み、特に幼魚は河川河口で確認することができる。

久慈川では、夏季になると下流域や河口に全長 3～4cm の幼魚の群れが見られ、その数は多い。

写真提供:稲葉　修氏

クロダイ（タイ科）

全長は 60cm ほど。国内では北海道南部よりも南の地域に広く分布している。幼魚は河川河口の汽水域だけでなく、時には中流域にまで姿をあらわす。

久慈川では、河口や下流域に多く見られ、その数も多い。河口では、クロダイ狙いの釣り人も見られる。

写真提供:稲葉　修氏

シモフリシマハゼ（ハゼ科）

全長 10cm ほど。日本各地に分布する。河口などの汽水域に生息している。春から夏にかけて、石や障害物の下などで産卵する。

久慈川では河口に生息しており、比較的多く見られる。河口でのハゼ釣りでも釣れることがある。

写真提供:稲葉　修氏

マハゼ（ハゼ科）

全長は大きい個体で 25cm くらいにまで成長する。日本各地に分布しており、特に下流域から河口にかけて多く見られるが、夏季に中流域までやってくる個体も見られる。

久慈川では河口や下流域に数多く生息しており、単に「ハゼ」と呼ばれて釣り人に親しまれている。

写真提供:稲葉　修氏

クサフグ（フグ科）

全長は 15cm ほど。北海道の南部から南側の各地の沿岸に普通に生息している。集団産卵を行うことで知られている。

久慈川では、下流域から河口部に生息することが知られているが、特に夏季に河口にて幼魚の姿が見られる。

④国内外来種と国外外来種

さまざまな魚類が生息する久慈川水系であるが、近年では釣人のために漁業組合や各種団体によって放流された魚種が多い。また、それらに混じって放流された、中部地方以西が原産である国内外来種が増加している。これに加え、国外から釣りの対象として、あるいは養殖業の振興のために持ち込まれた国外外来種もみられる。前者としてはオイカワ、カワムツ、ヌマムツ、ビワヒガイ、スゴモロコ、ゲンゴロウブナなどが、後者としてはニジマスやソウギョ、ハクレン、タイリクバラタナゴ、オオクチバス（ブラックバス）、ブルーギルなどがあげられる。いずれの種も、地史的な長い歴史を歩みながら形成されてきた久慈川独自の環境と魚類の生態系の中に、人的な要因によって放り込まれた種であり、在来種との関係が心配される。特に中流域の流れで個体数を増やし続けるオイカワやカワムツ、在来のタナゴ類と置き換わるように分布しているタイリクバラタナゴ、流域の溜池等で増加し魚食性の強いオオクチバス、他種魚類の卵まで捕食するブルーギルなどは、今後も久慈川水系の魚類達に大きな影響を与えるものと考えられる。これら国内外来種と国外外来種の動向には注意が必要である。

写真提供:稲葉　修氏

カワムツ（コイ科）

全長 15㎝。能登半島、静岡県以西の本州、四国、九州で見られたが、近年では関東地方の河川でも見られる。
河川の上・中流を中心に普通に見られ、特に流れの緩やかな淵に多く生息している。

写真提供:稲葉　修氏

タイリクバラタナゴ（コイ科）

全長 6～8 ㎝。アジア東部と台湾が原産で 1940 年代に長江からハクレンの移入に伴い日本に渡来し、ほぼ日本全土に分散してる。平野部の浅い池沼や河川敷内の池、あるいは河川や灌漑用のよどんだ場所に生息する

写真提供:稲葉　修氏

オオクチバス（バス科）

全長 30～50㎝。北米原産で 1925 年に芦ノ湖に移入され、その後各地に移植され、ほとんど日本全国に分布。
止水域を好み、湖沼をすみかとし、河川では下流域の流れのゆるやかなところに生息する。

写真提供:稲葉　修氏

ブルーギル（バス科）

全長 25㎝。北米原産で 1960 年に日本に移入され、日本全国の湖やため池に分布。
湖では沿岸帯の水草帯に、河川では流れのゆるやかな水草帯などに生息している

☆養殖メダカや養殖タナゴなどの放流の是非

現在、県内各地では「環境教育」や「川をきれいにする活動」等の計画の一つとして川や池に他地域原産や養殖したメダカやタナゴなどを放流する活動が盛んに行われている。これらの活動は久慈川水系の各地でも行われており、他地域から持ち込んで増殖させたメダカやタナゴ類を放流する個人や団体がみられる。しかし、これらの行為は逆に魚達にとってマイナスとなることが多い。魚に限らず様々な生物は、現在生息している場所（地域）において、その環境の形成とともに長い時間（歴史）をかけて適応してきた。そのことにより「同じ種でも、その場所ごとの色彩や模様、遺伝子が形成されていった」のである。このことからも、生物が少なくなったからといって他地域の個体を安易に放流するのではなく、「現在残る環境をできる限り保全し、その地域ごとの生物のありのままの顔（色彩や遺伝子）を大切にする」努力が必要とされている。

⑤分布上重要な魚類（希少種と減少種について）

久慈川水系では、前述したように分布上貴重な種や県内において減少している種がみられる。ここでは、これらの種について概説するが、大宮町の辰ノ口堰から河口までの区間（久慈川本流）においては、阿武隈淡水動物研究会や国土交通省の調査（平成 13 年度河川水辺の国勢調査）によって、スナヤツメ、ギバチ、オオヨシノボリなど環境庁（1999）や茨城県（2000）によって希少種以上にランク付けけされた魚種が確認された。

表 6-6　保全上重要な魚類

科名	種名	選定根拠
ヤツメウナギ科	スナヤツメ	「環境庁ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ」 絶滅危惧Ⅱ類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 希少種
	カワヤツメ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 危急種
サケ科	イワナ (在来個体群)	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 絶滅危惧種
コイ科	ヤリタナゴ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 危急種
	タナゴ	「環境庁ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ」 準絶滅危惧 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 危急種
ドジョウ科	ホトケドジョウ	「環境庁ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ」 絶滅危惧 IB 類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 希少種
ギギ科	ギバチ	「環境庁ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ」 絶滅危惧Ⅱ類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 危急種
メダカ科	メダカ	「環境庁ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ」 絶滅危惧Ⅱ類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 希少種
トゲウオ科	降海型イトヨ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 危急種
ハゼ科	オオヨシノボリ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 希少種
	ジュズカケハゼ	「環境庁ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ」 地域個体群 (関東地方)
	シロウオ	「環境庁ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ」 準絶滅危惧 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 希少種
	ボウズハゼ	「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 希少種
カジカ科	回遊型カジカ	「環境庁ﾚｯﾄﾞﾘｽﾄ」 絶滅危惧Ⅱ類 「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物＜動物編＞(茨城県版ﾚｯﾄﾞﾃﾞｰﾀﾌﾞｯｸ)」 希少種

ヤツメウナギ科　写真提供：稲葉　修氏
スナヤツメ

環境省 RL
絶滅危惧 II 類
茨城県 RDB
希少種

全長は 20cm ほど。北海道から本州、四国と九州に分布する。湧水のある細流や河川上流域下部から中流域に多く生息している。幼生期の個体（アンモシーテス）は泥の中に潜っている。久慈川水系では「ヤツメ」や「ヤツメウナギ」と呼ばれ、本流だけでなく支流の多くに生息していたが、湧水地の消滅や川底環境の変化などによって近年では著しく減少している。

ヤツメウナギ科　写真提供：渡辺重行氏
カワヤツメ

環境省 RL
－
茨城県 RDB
危急種

全長 50cm ほど。太平洋側では茨城県以北、日本海側では島根県以北の本州と北海道に分布する。産卵は春に中流域で行われる。
久慈川では、かつて中流域から下流域で採集されており、スナヤツメ同様「ヤツメウナギ」などと呼ばれていたが、近年では減少している。

サケ科　写真提供：稲葉　修氏
イワナ（在来個体群）

環境省 RL
－
茨城県 RDB
絶滅危惧種

全長 30cm 前後に成長する。久慈川水系では一部の支流にのみ生息しているが、このうち常陸太田市北部の個体群は天然記念物に指定されている。一部は禁漁区になっているが、生息域が短くいずれも小さな個体群である。どの個体も背部に明瞭な虫食い模様があり、これは遺伝的に固定されていると考えられる。河川周辺の森林伐採の影響や密漁等により激減している。

コイ科　写真提供：稲葉　修氏
ヤリタナゴ

環境省 RL
－
茨城県 RDB
危急種

全長 10cm 前後に成長する。本州、四国、九州（南部を除く）に分布する。河川中流域から下流域の淵や淀みにも生息するが、流域の水路や溜池などに多い。産卵期は春から夏。
久慈川水系では中流域や下流域に注ぐ支流や水路、溜池に生息していたが、近年では水田地帯の圃場整備に伴う水路の直線化や三面護岸工事、タイリクバラタナゴの移殖やマニアの乱獲によって産卵母貝であるマツカサガイやヨコハマシジラガイ、ドブガイ類とともに減少した。さらにマニアによって他水系産の養殖個体が放流されたことにより、野生個体は消滅しつつある。

コイ科　写真提供：稲葉　修氏
タナゴ

環境省 RL
準絶滅危惧
茨城県 RDB
危急種

全長 10cm ほど。神奈川県から青森県にかけての太平洋側の河川や湖沼に分布する。産卵は春から初夏に行われる。
久慈川水系では本流よりも支流に多く、場所によっては個体数が多い。しかし、環境の変化だけでなく産卵母貝であるカワシンジュガイやドブガイ類など、その生息地における二枚貝の減少と共に個体数が激減、あるいは消滅した生息地も見られる。

写真提供：稲葉　修氏

ドジョウ科
ホトケドジョウ

環境省 RL
絶滅危惧 IB 類
茨城県 RDB
希少種

全長は 6cm ほど。青森県や中国地方の一部を除く本州と四国の一部に分布している。湧水を水源とする細流や湿地に生息し、春から初夏にかけて水草のある場所で産卵する。

久慈川水系では、特に流域の湧水のある小川や湿地などに多いが、標高 500m 以上の山間の湿地に生息する個体群も見られる。しかしながら、本種は茨城県全域において減少傾向にあり、生息環境の保全を含めた保護対策が必要となっている。

写真提供：稲葉　修氏

ギギ科
ギバチ

環境省 RL
絶滅危惧 II 類
茨城県 RDB
危急種

全長は 20cm 前後の個体が多いが、時には 25cm に達する個体も見られる。東北地方と関東地方に分布するが、東北地方では本種の分布のない地域もある。河川中流域に多く、初夏に石の下に卵を産む。

久慈川水系では、かつては本流だけでなく多くの支流に生息していた。環境が変化したことにより、現在では「ギンギョ」や「ギギ」などの地方名が残るのみで姿を消した場所が多い。

写真提供：
㈱建設環境研究所

メダカ科
メダカ

環境省 RL
絶滅危惧 II 類
茨城県 RDB
希少種

全長 4cm 前後になる。本州から四国、九州、そして琉球列島に分布する。主に小川など細流の流れの緩い場所や、池、湖沼などに生息している。産卵期は地域や場所によって異なるが、春から夏の期間である。

久慈川水系では、主に久慈川本流の中流域から下流域沿いの水田周辺の水路や池などに見られる。しかし近年では、環境の変化によって減少しているだけでなく、他地域からの移殖個体によって久慈川水系独自の遺伝的特性が失われている地域があると思われる。

写真提供：稲葉　修氏

トゲウオ科
降海型イトヨ

環境省 RL
—
茨城県 RDB
危急種

全長は 8cm 前後。北海道、本州、北九州の一部に分布する。早春に海から河川へと遡上し、春から初夏にかけて河川中流域から下流域、あるいはその流域の水路や湧水地で産卵する。孵化して全長 3cm ほどに成長した稚魚は海に降りて成長し、翌年河川へと遡上する。

久慈川では、中流域下部～下流域にて成魚や降下する稚魚を確認している。

写真提供：稲葉　修氏

ハゼ科
オオヨシノボリ

環境省 RL
—
茨城県 RDB
希少種

全長 11cm ほど。北海道を除く日本各地に分布するが、本種のあまりみられない地域もある。河川上流域下部から中流域にかけての瀬に生息している。初夏に産卵し、孵化した仔魚は海に降下して全長 2cm ほどに成長すると河川に遡上する。

久慈川本流では常陸大宮市以北の瀬に多く、支流の山田川や里川にも生息している。しかし、近年では川底環境の変化で減少している。

写真提供：稲葉　修氏

ハゼ科
ジュズカケハゼ

環境省 RL
地域個体群（関東地方）
茨城県 RDB
—

全長 5cm 前後の小さなハゼ。北海道から九州に分布するとされている。河川中流域から下流域、そして流域の溜池や湖沼に生息するが、近年、関東地方の河川中流域に見られるものは、他の水域のものと遺伝的に異なっていることが報告されている。

久慈川水系では、中流や下流域の流域に見られる溜池や水路から確認されているが、環境の変化や外来種の影響によって年々減少している。

写真提供：稲葉　修氏

ハゼ科
シロウオ

環境省 RL
準絶滅危惧

茨城県 RDB
希少種

全長 5cm 前後。北海道南部から九州にかけて分布する。普段は沿岸域に生息し、春に河川下流域に産卵のため遡上する。

久慈川では、主に 4～5 月に下流域にて姿を見ることができる。かつては数多く確認できたようであるが、近年では下流域や河口の環境や水質が変化したことによって減少してしまった。

写真提供：稲葉　修氏

ハゼ科
ボウズハゼ

環境省 RL
－

茨城県 RDB
希少種

全長 12～13cm。主に茨城県以南の太平洋側から琉球列島に分布するが、近年では福島県からも確認されている。河川上流域下部から中流域の瀬に多く生息し、初夏に産卵する。

久慈川では、常陸大宮市以北で確認されており、夏季にアユの友釣りをする釣り人のオトリアユに吸い付いてくることもある。

写真提供：稲葉　修氏

カジカ科
回遊型カジカ

環境省 RL
絶滅危惧 II 類
（ウツセミカジカに含めて）

茨城県 RDB
希少種

全長は 18cm ほどになる。北海道南部から本州、四国、九州に分布する。河川中流域から下流域の瀬に生息し、春に産卵する。

久慈川では、かつて大宮町よりも下流側の中流域から下流域に多かったとされるカジカが本種であったと思われる。現在では下流域の瀬に見られるが個体数は少ない。なお、久慈川支流に生息する陸封型カジカも環境の変化によって減少が著しく、各沢の個体群ごとの保護の必要がある。